

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: [shakaitsushin@nifty.com](mailto:shakaitsushin@nifty.com)

東京都渋谷区本町六丁目二八―二九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〇〇―〇〇―九―五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

## くもくく

### ■巻頭言

「働き方」は労働日をめぐる闘争

滝野 忠…2

『資本論』第八章労働日を読もう

「補強討議案」撤回を

山下 俊幸…3

―千葉県本部大会報告―

理科教育・事終わり

藪 芳郎…6

―地域に生きる子どもたちに必要な知とは何かを問い続けて(二)―

人に志あり

青年マルクスの志と、神・宗教

中澤 秀行…9

―マルクスの志、その追求の軌跡を追う(三)―

「改憲を迎え撃つ」必読の書

原 野人…12

―矢田部理・新社会党初代委員長『いつも全力。こんな議員が国会にいた!』―

読者からのおたより

……………12

# 旬刊 社会通信

NO.1253

二〇一七年十二月一日号

二〇一七年十二月一日発行  
(毎月一日・一五日二回発行)

## 「働き方」は労働日をめぐる闘争

『資本論』第八章労働日を読もう

労働者にとって「経済学」とは、だれもが知っている『資本論』です。

『資本論』出版は1867年ですから、今年（2017）は150年の記念すべき年でした。明治維新は1868年、マルクスは、日本が封建社会から資本主義社会へ歩みを進めた時に、すでに資本主義のしくみと労働者階級の歴史的任務を明らかにしたのです。その内容は現代そのものです。

資本主義は、商品生産の時代です。人間の労働力も商品となりました。労働力も商品として価値をもち、価格である賃金を受け取ります。資本の利潤は、労働力の売りと買いによる不払い労働（賃金部分を超える労働）、剰余労働から生まれます。労働時間法制は賃金が少ないほど支払われない労働、剰余労働がふえるという法則、つまり労働日をめぐる闘争です。財界そして政府の「働き方改革」のねらいは労働日を通じて資本のとり分にしたいにあります。

資本家が「経営のバイブル」と謳（うた）うのが『トヨタ生産方式』（ダイヤモンド社）です。初刷りは1978年、いま百刷りをはるかに超えています。トヨタ生産方式が強調するのは「徹底したムダ排除」「原価低減」です。トヨタ生産方式は①手待ち、②運搬、③加工そのもの、④動作など七つをあげ、この方式は「剰余人員をはつきり浮き出させるシステム」といい、その実現の方策は①ジャスト・イン・タイム（必要なものを必要なだけつくる）、②自動化（ニンベンのついた「働」、生産現場でのムダ排除）です。たゆまぬ生産性向上とともに徹底したムダ排除が、「原価低減」に結びつき、資本を肥え太らせる、できるだけ少ない人数でモノをつくり、人件費等を減らすことが資本の目的というのです。つまり、「省力化」でなく、「省人化」です。トヨタ生産方式から40年、労働・経済情勢は新しい段階に入りました。60～70年代の中心産業は鉄鋼・造船、80年代以降は自動車、電機へと産業構造は変化しました。電機産業では21世紀に入り白モノから半導体へです。製造業にたずさわる労働者はロボット化、ME、IT合理化によって減る一方。増え続けるのが商業・流通・卸小売・介護産業で、労働者の70%強を占めるまでになりました。

政労資は手を携え、サービス産業の生産性向上を大合唱です。生産性向上は労働時間を短縮させ、自由な時間をふやす基礎を作ります。しかし、資本主義社会にあつては、企業の儲けをふやす手段となり、労働強化や失業をうむ方向に作用します。

独占企業間の生死をかけた世界競争、むきだしの搾取戦がおこなわれている現在、資本は自民党政権に「企業が世界一活動しやすい国にせよ、資本が肥え太ることを妨げる規制をとつ払え、労基法は資本にとってはおじゃま、改悪せよ」と命令します。企業の目的は利潤、最大限の利潤で、その欲望に限りありません。

強まる搾取の度、管理と抑圧の高まり、不安定雇用労働者の増大は長時間労働の是

正、格差拡大の是正へ同一労働同一賃金等「働き方」を社会・労働・政治問題としました。「働き方」は労使で対立します。資本は労働者をどう効率的に「働かせ」、不払い労働Ⅱ剰余労働を搾り取るかに全力を上げます。労働者は労働力の持ち手とし、不払い労働部分を減らす「働き方」を求め闘います。

労働立法は歴史的に「労働日」をめぐる闘いとしてありましたし、今もです。政府が来年の通常国会に出すとするのが、労働基準法の全面改悪です。労働基準法は労働時間の基準を1日8時間、1週40時間と定めています。改悪案では「時間ではなく成果で評価される働き方が、これからの労働時間制度」と残業代を支払わない高度プロフェッショナル制度の創設、「みなし労働時間」分だけしか残業代を支払わない裁量労働時間制の対象業務拡大です。「残業代」という概念をなくせば資本の剰余価値、したがって利潤はさらにふえる、そして労働者派遣法のように適応範囲を拡大していけばいいというわけです。

今年『資本論』出版150年、マルクスは、「まず労働日から読め」といっています。労働日は第8章にあります。構成は①労働日の限界、②剰余労働に対する渴望―工場主とボヤール、③搾取に対する法的制限を欠くイギリスの産業部門、④昼間労働および夜間労働、交替制、⑤標準労働日のための闘い―イギリスの工場立法の成立と反応となっています。

『資本論』150年を機会に第8章の労働日を読むことは自分の労働実態を考えさせ、心を耕作し、労働者としての自覚を高めてくれるにちがいません。(滝野忠)

## 「補強討議案」撤回を

―千葉県本部大会報告―

10月29日(日)開催の党千葉県本部大会にむけて、私は既に『社会通信』誌1250号に掲載された「本部方針『中期政策の補強討議案』の撤回と、下部討議の即時中止を求める意見書」を9月29日付で提出し、大会当日、主旨説明として発言した。

「ベーシックインカム」については、千葉電通支部のN氏が「ベーシックインカム導入は科学的社会主義の否定」と題した意見書を提出し発言した。また、全電通千葉県支部で反合理化闘争、電話交換業務における職業病・頸腕障害の闘いなどを通じて強大な活動家集団を組織し、当局と結託した全電通本部右派と闘いぬいた当時の社会党左派の中心を担った市原芳樹氏(90歳)も大会に参加し発言した。

誌面の都合上、私の発言と本部長南書記長の答弁を報告する。発言時間は7分に限定されたため、準備した発言要旨すべて言及することはできなかった。当日の発言を補強しつつ報告させていただく。

### 路線転換

私は第一に、『中期政策の補強案』は、これまでの党の政策(路線)を一変させるものであり、社会主義の実現とは無縁なものであり認められない、と立場を明確にし、この議論が進められることによって党内の不団結が助長されることを指摘し、その上

で、このような重大な提案をするにあたって、提案者である本部は充分なる準備や意志統一があつたとは考えられない、と指摘した。

重大事案であるにも関わらず、大会議案書、その後、機関紙『新社会』による加藤政策委員長の解説（3回）、そして8月になって討議資料が出された。本来、議案を提案するに当たって、中執おける十分な討議と意志統一、一括した資料を提起すべきであること。

## 消費税

本部関係者による説明会、学習会での説明も説明者によって異なること、例えば、議案書では「年金」として表現しているため、基礎年金だけのことと受け止めていた。しかし、ある学習会で参加者が「自分は現在夫婦2人で26万円の年金をもらっているが、ベーシックインカムを实施了らした場合、自分たちの年金は下がるのか」との質問に、講師は「現在の計算では下がる。下がる方がいることについて理解が必要だ」という回答がなされた、ということを知った。そもそも、厚生年金は一部税金が入っているとは言え労資で拠出したもの（賃金からの天引きと労働者から搾取した資本側の折半、つまり全額労働者負担）で賃金・退職金の後払い的性格のものである。何ということか。

## 資本主義社会であること忘れまい

また、討議資料では『共助の論理』に従って消費税で国民が均等に負担する」と説明されている。これまでの消費税反対、自治体によっては党員である議員が議会で消費税増税反対決議の賛同を求めて奮闘してきた。

以上の疑問について、長南書記長の答弁は「大会後、よく理解できない、との声もあり追加して解説した」「中執での見解の相違はない」「消費税については、校正前のもので誤植であり、訂正した文書を送ることにしている」と言われた。ここで問題なのは、議案書本文でも「・・・それでも不足するなら初めて共助の論理にしたがって、国民が均等に負担し」となっていること、また、長南書記長が校正前のもので・・・と弁解したのは、本音として「消費税の値上げ」が、見え隠れすることだ。

また、議案書では「社会的連帯を回復するために、全員が受給者となる普遍的福祉に転換する」という。私は例を上げて孫正義氏など大金持ちに10万円支給しても、太平洋に目葉を落とすようなものだ」と批判した。

「ベーシックインカム」導入の根拠として、「中期政策は主に20世紀末の情勢を基に議論した。大きな情勢の変化の中で中期政策の想定を超えた・・・現憲法の社会権条項、とりわけ『制度設計』が破壊されてきた」その結果、「ワーキングプア」の増大によって十分な社会保険をかけられる良質の雇用が極めて少なくなっている」とし、その要因として、1985年の「労働者派遣法」、民間労働組合の右傾化、1985年の中曽根政権下での行革名目の公共企業体の民営化による公共企業体労働組合の解体、弱体化、1995年の日経連の「新時代における日本の経営」などにより組織率が18%を割り込み、使用者への対抗力の喪失」と分析している。新社会党綱領

『21世紀宣言』付・私たちの中期政策が策定されたのは2002年であり、以上のような情勢は織り込み済みであったはずである。2002年と今日の情勢が大きく変わったとは思えない。資本主義であること、階級対立は存在していること。独占資本は、この10年間で毎年20兆円以上の内部留保を積み上げ、今や巨大な内部留保（利益準備金）は、前年より28兆円増の406兆円に達している。

一般的に内部留保金は利益準備金のみを取り上げているが、その他の為替変動準備金、貸し倒れ引当金、様々な準備金、引当金があり、一説には合計すると550兆円とも650兆円とも言われている。

他方、手取り実質賃金は低下し、格差社会、貧富の差などと言われているが、一言で言えば、労働運動がなくなり、労資の力関係の反映にすぎない。総評解散・連合の時代、組織率の低下と嘆いて、小手先の政策や要求を掲げても力がなければ何ら変わることはない。よって、労働者思想の確立、労働運動の階級的強化、階級闘争を強めなければ現状を変えることは元より、労働法制の改悪策動に見られるように更に悪化することは目に見えている。

「一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、すなわち自分自身の生産物を資本として生産する側での、貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである。」（マルクス『資本論』第一巻、第23章）

### 向坂先生を否定

私は、「賃労働からの解放」「労働力商品の脱商品化」などを文言をみて、今回の「中期政策の補強案」提案の背後に労農派マルクス主義・向坂理論、運動論からの決別・否定、そして宇野理論への転換を読みとった。

日本の労働運動、社会主義運動は自然発生的に高揚したわけではない。そこには必ず指導者のもとより、労働者階級の苦闘があったことを忘れてはならない。戦前、戦後を通じて弾圧化の中で奮闘してきた先人達を思い起こし、労働運動が弱体化した要因を分析し、総括する。そして時間がかかっても地道に活動家の養成と小さな闘いを積み上げ、意識的により多くの社会主義者を育てることである。

千葉では「全電通闘争」「国労の反マルク性闘争の勝利と職場闘争」「国鉄闘争」「京成の反合理化闘争」の経験を持っている。千葉県の多くの党員は、その指導者、活動家、経験者であったことを忘れてはならない。

### 離党届を胸に

実は、私は今大会の結果如何では、離党しようと思っし「離党届」を懐に、支部委員長に提出する覚悟を決めていた。大会2日前、信頼する二人の方に事前にその旨を伝え相談した。一人は千葉の人で、もう一人は、東京で党の重責を担っている人、特に東京の方は国鉄闘争時に散々相談や悩みを聞いてもらった方で、ここから信頼し家族ともどもで、何度か北海道旅行もしている間柄である。彼に何の挨拶もなく離党したのでは仁義に反すると考えたからであった。大会後も先輩や友人数名に相談したが、今離党するべきではない、と言われた。

もう一つ私の心を揺り動かしたのは、県本部書記長の鳩川氏の集約であった。彼は大会集約の中で、「山下とは50年来の仲間として活動してきた。意見書として提出されているので、きちつと受け止める。」と言われた。市原の党員は解雇撤回闘争を闘った当事者であり、私と鳩川氏は解雇されなかったが、闘争の責任ある立場にあった。私が39歳で会社を辞して権利問題研究会の専従事務局長3年、そのご44歳から国鉄闘争に没頭できたのも鳩川氏をはじめ地元の仲間であった。改めて感謝し離党は一旦立ち止まり年内の動向を見守ることにした。

(山下 俊幸)

## 理科教育・事終わり

―地域に生きる子どもたちに必要な知とは何かを問い続けて(二)―

### 一、宮沢賢治の思いに触れて 「立ち位置」

もう何時だったかも忘れましたが、三十年ぐらい前の人権・同和教育の全国研修会で「教師宮沢賢治について」の講演会を聞き、賢治の思いに触れました。それから、ときどき本を探しては当時の授業の再構成(八十歳ぐらいの生徒たちからの聞き書き)に学んでいました。授業の初めに賢治は「教科書は使いません。でも、大切なことは二回言いますから、よく聞いてください。」と、語ったそうです。そして、その思いは、「ひまわりのような人間になるな。」という・・・、東京のような中央を目指す立身出世の生き方でなく、岩手の地域に生きる知恵を学びとろうというものであったようです。

炭坑気質があり、ガラが悪いと差別された筑豊(直方に生まれた私には、賢治の思いは、少しづつしみ込んでくるものがありました。目の前の子どもたちは、エリートもいるのかもしれないが、多くは、地域に生きる保護者の皆さんの生き方を踏襲するだろうと考えました。「生きるために必要な知」は、「立ち位置」(人権・同和教育でちよつと前に使われた言葉)によつて異なるのだと言われます。同じ出来事も、立ち位置により違つて見えるということです。

先日の八幡南校内の講演会で中村哲氏が言われたように、アフガンで体験されたアメリカの反テロの聖戦も、攻撃を受けた現地の一般の人々には、日本で報道された正義の戦いの逆の様相だったということです。

理科教育は、「すべては、疑いうる」という、近代科学の原則から出発すべきものと考えてきました。目の前の現実という「現象の本質」を探るために探究し続ける、水俣病をはじめとする公害を見てきた世代として、科学技術すら再点検をする課題でした。

### 二、生命科学の技術革新の影を追つて 「考える」

生物学の学習の中に性染色体異常の性別の揺らぎがあります。若い頃、心ない態度で扱っていたことがあったことを恥じています。「障がい」の問題を興味本位に扱うことがどれほど間違つているか、「人権・同和教育」に学び、自分の中の差別意識を

糺(ただ)し続ける中で得た大きな反省です。遺伝学の「優性・劣性」の表記に、先日、遺伝学会がやっと「顕性・潜性」と訂正するよう重い腰を上げました。

「劣性」遺伝子という表記が、病気などの形質を連想させ、マイナスイメージを拡大するという戦前からの指摘が、一世紀後に動きとなったのです。

科学の知的探求の速度はだんだんと加速するのにも、関連する倫理観が追いついて行かない、とても危険な状況が拡大しています。特に出生前検診の普及は、生まれる前から「障がい」者の生存権を奪ってしまいました。遺伝子検査の普及は、特定の疾病の遺伝子を持つ家族の差別につながっています。

誰の「立ち位置」から教材を扱うのが、問われ続けています。現代社会の基本原則になっている便利さや経済性だけを重視し、劣位に立たされる人々を切り捨てる授業内容になることは避けねばと強く思ってきました。

科学の発見した技術も原爆の使用のような結果を招くことは、子どもたちに強く伝え、考えてもらいたいことのひとつです。

科学には期待される客観性も一定あるとはいえ、あらゆる事実は、さまざまに人々に影響し、場合によっては生存する条件も奪ってきました。薬害エイズにおいては、未完成な血小板成分製剤は、多くの血友病の人々の体内にHIVの感染を引き起こしました。20世紀に完成された輸血技術が一般に理解されるより危険性の高いものであるという認識が少しずつ広がってきました。臓器移植並みのリスクのある技術であるとの認識ももっと広がる必要があります。

GM作物や原子力発電についてもその未完成さを疑っていく必要があります。遺伝子組み換え作物の検証は、多くの時間と費用をかけ完全になさなければなりません。食べ物を経済性だけで普及し、安全性チェックを怠れば目に見えないアレルギーや発がんなどの危険性を拡大することとなります。農薬など化学物質の混入と同じように厳格な安全チェックを課すことが21世紀の人類生存の条件となりそうです。原子力発電と核廃棄物の処理問題も言うまでもないことだと考えています。

便利さや経済性が、格差社会の進行とともにリスクに遭遇する弱者を生み出し、この課題の解決は、技術的なものではなく、なしえない臨界点に達しつつあることを強く感じてきました。子どもたちが「自らを守る生き方」を探す課題を、理科教育においてもより深く掘り下げていくことが、受験学習に流れがちな状況の中で求められています。大切なことは、知識量ではなく、現実にも目の前に存在する現象をどう見たらいいのか、課題を発見し、深く探求する科学的態度が最も大切になると考えてきました。権威的な常識や他人の言うことを鵜呑みにせず、自分なりに考えてみる、稚拙でもいいから自分の頭を使ってみることが一番大切になってきているのではないのでしょうか。

### 三、「自分の頭で考える」ためのかじ取りに必要な現状認識

①受験指導の不毛な部分 センター試験が生徒・保護者の負担増削減のために導入されてからいく年になりますか。日教組が差別になると考えた進路の複雑化に反対していた過去の関係から、センター試験をどう評価してきたでしょうか。この画一化した試験こそ健全な若者の思考力を奪い、怠惰な反知性主義を生み出す1つの元凶では

なかったのか。同じ出発点からの競争が正しいなら、思考は単一化し、センターに關しては、思考を奪い、パターン化するしかなかったのです。能力主義を推進し、国際競争に臨もうという政府も困っているようです。

人間の思考は、本来、「生存」という現実の課題の中、あらゆる方向性に分散化し、具体的課題に対応すべきものです。特に、世界で弱い立場に立たされる被抑圧者にとり、「立ち位置に立つ教育」「広い意味で、学校教育でなく、多様な場面がある」は、あらゆる社会・経済的差別の中、自立と解放のために強い必要性を帯びています。私ら筑豊の体験からは、石炭資本撤退後の棄民化から、立ち上がろうと勝ち得た石炭六法や、部落差別からの解放を見据え同和対法を引き出した知恵を想起します。そういう意味で、先輩たちは素晴らしかったと考えます。カッコウをつけるのではなく、生活のために課題を明らかにし、赤裸々に闘うこと、本来の「人権・同和教育」は、集団的などろどろの取り組みの中から光を求めて編み出されてきたと理解しました。校則違反でもアルバイトをしないとなどもならないとか、差別されたので思わず殴ってしまったとかの、さまざま問題群の中から真に生み出されたものだったと思います。

②「人間たるに必要な真の誇り」と知恵を求め続けること　とても、めんどくさいのですが、人は、とにかく目の前の人より自分は偉い「美しい、能力があるなど」と考えないと自分がみじめで死にたくなる人まで出るといふ愚かな生き物です。

立身出世主義は、そのような心象の結果として、江戸時代から明治において猛威をふるう社会意識でした。今は、あまりにパロディー化しつつありますが、いまだに心に巣くう考え方であるでしょう。そのような生き方では、真実を追求する方向性はささぎられ、自己保身に付度するばかりになるでしょう。

官僚機構が支配する公教育の限界を感じながら今日まで、従属労働のもと、働く者として一定妥協して来ました。

公教育が地域に生きる子どもたちに有用な営みとなるためには、教職員の自律性が問われてきました。ほとんど唯一の最低限の条件は、日教組という労働組合で従属性に抵抗することぐらいでした。官僚制の手先になり、自己保身のため、子どもたちの「立ち位置」に立脚する知恵を探し続ける作業を怠るなら、形骸化した知識の切り売りに終始し、最悪は戦前のごとく「国家のために死ぬ」洗脳にさえ動員されることになるのです。ハンナ・アレントが指摘した「全体主義」を生み出した陳腐さは、立身出世主義のような上昇志向の中で支えられていたことをもう一度想起してみる必要があります。そして、地域に生きる子どもたちを基盤にする教育に、子どもたちとともに取り組む中で教師としての真の誇りを打ち立てていく意味を、もう一度問い直さねばならない時代が目の前で展開しているのです。

日教組にも入れない若い教師たちの現状は、深刻だと感じざるを得ません。民主主義の体験がない人々が、洗脳され続ける反知性的社会の進行が続いています。原子力の技術としての未完成さを指摘し、民衆の立ち位置に立つ科学を求め続けた高木仁三郎のような考え方を理科教育は、必要としています。

(福岡高教組教員 藪 芳郎・つづく)

## 人に志あり

### 青年マルクスの志と、神・宗教

—マルクスの志、その追求の軌跡を追う(三)—

#### (四) 青年マルクスの志と、神・宗教

高校生のマルクスが残した『職業の選択に当面する一青年の考察』ですが、ところで、この稿を読まれている皆さんは、この全文を読まれたことはあるでしょうか。

私には気になっていたのである部分がありました。向坂先生が引用されている前記の箇所には、それぞれ「・・・」となつて省略されている箇所があるのです。

『マルクス・エンゲルス全集』(大月書店)の第40巻「マルクス初期著作集」には、この全文が収録されていますが、前述の「・・・」の箇所は、『全集』によると次のような一文となります。(註)大月書店版『全集』では、向坂先生が前出の中で引用する訳文とは異つた訳になっています。)

「宗教そのものは、万人が追求する理想が人類のために自己を犠牲にしたことをわれわれに教えている。そして、だれがこうした金言をあえて否定するであろうか?」

「・・・」の箇所は、「宗教」は、「万人が追求する理想が人類のために自己を犠牲にしたことをわれわれに教えている。」とし、続けて「そして、だれがこうした金言をあえて否定するであろうか。」と述べ、宗教の追求した理想を「あえて否定するであろうか。」と、重く肯定しているのです。

そもそも、この作文の冒頭は、この『全集』によると次のように始まります。

「動物にたいしては、自然自身が動物の動くべき活動領域を規定している。そして動物はこれをこえ出ようとはつとめず、また他の領域があることを予感することさえせずに、安らかにこの活動領域を仕上げていく。人間にたいしてもまた、神が人類および人間自身を高貴ならしめる普遍的な目的をあたえたのであるが、神はこの目的を達成しうるための手段をさがしもとめることを人間自身にゆだねた。神は、人間に最もふさわしい、そして人間が人間自身と社会とを最もよく高めることができる立場を社会のなかでえらぶことを人間にゆだねたのである。」と。

冒頭の一節には、なんと、「神」が登場するのです。今更のように思うのですが、青年マルクスのその生涯を貫いた志は、「宗教」に導かれ、「神」が「人類にあたえた普遍的な目的」として「人間が人間自身と社会とを最もよく高めることができる立場を社会のなかでえらぶことを」確信し、そうした行為の出来る立場をして、自分自身の「職業」としようとしたことは明白だと思われまます。

幼少期から青年期のマルクスにとつては、「宗教」や「神」が重要な位置を占めていたことは間違いありませんが、この「神」や「宗教」とは、一体何かということです。マルクスのことを知るには、マルクスの亡くなった時のエンゲルスによる「マルクス葬送の辞」(1883年)と言うマルクス略伝があり、これは必読の一文です。

そして他にも辞典のためにエンゲルスによって書かれた「カール・マルクス」(1892年)という略伝がありますが、この中の冒頭で、エンゲルスはマルクスを次の様に紹介しています。

「ハインリッヒ・カール・マルクスは、のちに法律顧問官になった弁護士、ハインリッヒ・マルクスの子供として、一八一八年五月五日、トリールに生まれた。ハインリッヒ・マルクスはその子の洗礼証書にもあきらかなように、一八二四年に一家をあげて、ユダヤ教からプロテスタントに改宗した人だった。」(『マル・エン選集』新潮社第12巻239頁)とあります。

向坂逸郎著『マルクス伝』(新潮社)の「第二章 少年時代」によると、マルクスの祖父も父親も、ラビ(ユダヤ教の律法学者)だったそうです。そして、マルクスが生れて6年後に、キリスト教に改宗しています(同書37頁)。したがって、高等学校の卒業作文を書いた時のマルクスは、プロテスタントのキリスト者であったということです。

※〔註〕マルクス・エンゲルスの優れた略伝、勉強する時に無限に役立つそれは、前述のエンゲルスの作品と共に、なんと言ってもレーニンのそれでしよう。

岩波文庫の『カール・マルクス他十八編』に収録されている「カール・マルクス」、「フリードリッヒ・エンゲルス」、そして「マルクス主義の三つの源泉と三つの構成要素」は、マルクス・エンゲルスの勉強に欠かせぬ必読の文献です。マルクス・エンゲルスの主要な作品の、無駄のない簡潔明瞭な「解題」でもあります。

## ☆☆☆ ちょっと寄り道 ② 作曲家メンデルスゾーンの改宗 ☆☆☆

私が『社会通信』編集人の滝野さんと偶然再会したのは、2012年12月1日、浜離宮朝日ホールでの「モーツァルト・トリオ」(ヴァイオリン・カントロフ、ヴィオラ・メンデルスゾーン、チェロ・藤原真理)の演奏会でした。しかもこのトリオによる最終公演日ということだけでなく、名手カントロフは、このツアーをもってヴァイオリンを弾くことに終止符を打つというのですから、私は遠路出掛けました。ベートルヴェンやシューベルトの弦楽三重奏曲等を堪能しました。

滝野さんご夫妻は、真理さんの演奏会にはしばしば出かけられるようですが、私の真理さんとの出会いは、彼女が1978年チャイコフスキーコンクールで2位(本選で繰り返し箇所を飛ばして演奏し、このミスが無ければグランプリだったと言われています。)の翌年、松本市民会館で彼女のリサイタルがあり、その時、モスクワのメロディアに入賞記念に録音した輸入盤LPから、彼女のプロフィール(ロシア語と英語の表記)を拙い訳で紹介したことに始まります。

カントロフとは1987年秋に初めて新宿文化会館の楽屋で会うのですが、この時はフランスのオーヴェルニュ室内管弦楽団の日本デビューでした。カントロフが指揮とソリストを兼ね、もう一人のソリストは藤原真理さんでした。このオーケストラでチェリストをしている大野尚志さんは高校時代からの友人で、お陰様でリハーサルの見学もさせてもらいましたし、彼の通訳でカントロフや、後にロンドン交響楽団のコンサート・マスター&オランダ室内管弦楽団の音楽監督にも就任する、当時19歳の

ゴルダン・ニコリッチとも話をさせてもらいました。この出会いと経験は、後に松本市音楽文化ホールでの仕事に大いに役立ちました。

ところで、モーツアルト・トリオのヴィオラ奏者であるウラディミール・メンデルスゾーンは、余りにも有名な作曲家であるロマン派の巨匠、フェリックス・メンデルスゾーンの末裔ということです。

ユダヤ人であるフェリックス・メンデルスゾーンも、7歳で兄弟姉妹と共にキリスト教に改宗しています。メンデルスゾーンは、作曲家としてだけでなく、指揮者、ピアニスト、オルガニストとして、また室内楽奏者としてもヴァイオリンやヴィオラも演奏しました。面白いことに、このメンデルスゾーンが、イギリスでロンドンデビューする時の話は、『資本論』の一節を思い出させます。なぜなら、イギリスでは無名の青年が、そのデビューに際し、ポスターには「偉大なる哲学者、モーゼス・メンデルスゾーンの子孫」と紹介されていたと言うからです。ここまで記せば、お気づきの方もいるでしょう。

作曲家メンデルスゾーンの祖父は、当時有名な哲学者であったと言う訳でして、『資本論』でも、次のように登場しています。

「私は、ヘーゲルの弁証法の神秘的側面を、三〇年ほど前に、すなわち、なおそれが流行していた時代に、批判した。しかし、ちょうど私が『資本論』第一巻の述作をつづけていた時には、いま教養あるドイツで大言壮語しているあの厭わしい不遜な凡庸の亜流が、誇り顔に、レッシングの時代に勇ましいモーゼス・メンデルスゾーンがかのスピノザを取扱ったように、すなわち「死せる犬」としてヘーゲルを取扱っていた。したがって私は、公然と、かの偉大なる思想家の弟子であることを告白した。」  
〔『資本論』岩波文庫第一分冊31〜32頁〕と。

モーゼス・メンデルスゾーンの登場する『資本論』第二版の後書で、マルクスは自身の弁証法とヘーゲルのそれとの違いを述べながら、自分は「かの偉大なる思想家（ヘーゲル——中澤〔註〕）の弟子」であることを「告白」しますが、その次に続く箇所は、弁証法を知り、それを現代社会への適用をした場合に、どのようになるかを記した重要な一節です。それは、次のような、真実故に正に強烈な一文です。

「弁証法は、その合理的な姿においては、ブルジョア階級とその杓子定期的な代弁者にとつて、腹立たしい、恐ろしいものである。というのは、それは現存しているものの肯定的理解の中に、同時にその否定の理解、その必然的没落の理解を含むものであり、生成した一切の形態を運動の流れの中に、したがってまた、その経過的な側面にしたがって理解するものであって、何ものをも恐れず、その本質上批判的な革命的なものであるからである。

資本主義社会の矛盾に充ちた運動は、実際のブルジョアにたいしては周期的な景気循環の移り変わりにおいて、もつとも切実に感じられている。近代産業は、この循環を経過するものであって、その頂点が一般的な恐慌である。恐慌はまだ先行の段階にあるが、ふたたび進行を始めている。そしてその舞台の普遍化していることによつ

て、ならびにその作用の強化されていることによって、神聖なる新プロイセン的ドイツ国の成上り者どもにすら、弁証法をたたき込むであろう。」〔『資本論』第一分冊3頁〕

☆☆☆ ちよつと寄り道 ② おしまい☆☆☆

〔二〇一七年九月十四日早朝 〔『資本論』第一巻刊行百五十年の日に〕

（中澤 秀行・つづく）

## 「改憲を迎え撃つ」必読の書

― 矢田部理・新社会党初代委員長、『いつも全力。こんな議員が国会にいた』―

弁護士になった59年には総評と炭労の要請で三池闘争に派遣され、歴史的な闘いの現地に6カ月常駐。60年安保闘争の現場でも。以来58年間活躍。北海道炭鉱系列の閉山問題にも取り組む。砂川闘争や、恵庭事件にも関与、百里基地の闘いを指導。全交連や国労本部の弁護士に参加。74年に参院議員に。様々な労働争議に取り組み。73年には東海第二原発の設置許可取り消し請求訴訟の弁護士団長。2012年には第二次訴訟を提起して現在共同代表として奮闘中。

国会での活躍は中曽根首相との論戦をはじめ、公害、原発問題やロッキード疑獄、リクルート疑獄の追及など枚挙にいとまがない。キューバとの交流とカストロとの会談。小選挙区制には同志を率いて参議院で否決したのに、だれがどのようにして成立してしまっただか。社会党はどのようにつぶされていったのか。新社会党はいかにして立ち上げたか等々、改憲を迎え撃つ皆さん必読の書である。（原 野人）

◇梨の木舎発行 ◇定価2200円 ◇送料は矢田部事務所が負担

◇申込みは 090(2145) 5170 (吉岡)

## ◇読者からのおたより◇

「何だかなー」補強案は『共助の論理』に従って国民が消費税によって均等に負担し…とあります。補強案(案)の段階では「消費税」となっていました。これは拙いと訂正されたと聞いていますが、実際の補強案は上記記述なのでしょうか？そもそも私の総支部内では、この補強案に関する討議をしようとの話も聞いていないので、党内議論がどう進んでいるのか皆目分かりません。

労働運動についての主張は①民間大企業労組は正社員クラブと化した、②公労協組合は弱体化しまともな賃上げさえできなくなった、③組織率も18%を切り、④対抗力を喪失した状態となっているとしています。社会主義社会は組織された労働者の団結と闘いによって成し得ます。その労働組合運動に新社会党が現在どれだけ影響力を持っているのか。①④の状況に至った総括を行えば、おのずと党としてのやるべき道は見えてくると思うのですが・・・。

今の党の勢力を冷静に分析すれば、当面連合政権ができる可能性は見通しうる限り大きくはありませんが、新社会党のいまの組織力で連合政権の中心は担えるとは思えませんから、党員は当惑、他党からは失笑を買うだけで終わります。数年前、国政選挙で新社会党としての候補者を擁立しながら、社民党などの選挙協力を得るために「新社会党」の看板を下ろしたことを思い浮かべます。

なので、今のBI議論も「何だかなー」というのが正直な心境です。

（三姉妹）

とんでもない！ BIに今、私の周りでも反対の声をあげる人が多くいます。BIを基礎年金、生活保護、失業保険、その他福祉給付に置き換えることは財政的にも実現することは不可能でしょうが、仮にも実現して生活保護などの制度が廃止された場合社会全体の窮乏化が急激に拡大しますよね。党を破壊するとしても「補強案」です。

（山梨・上原和夫）